はじめに

このたび、平成 18 年度の調査・研究の業績を、「福井県衛生環境研究センター年報（第５巻)」としてとりまとめました。
ご高覧のうえ、率直なご意見・ご指導をいただければ幸いです。

さて、当センターが衛生研究所と環境科学センターの統合により発足して５年余、本県における保健衛生や環境保全の技術的中核機関として「調査・研究」、「試験・検査・測定」、「研修・指導」、「情報の収集・解析・提供」の４つの役割を担い、地域に密着した業務を推進してきました。

一方、2007 年問題が正念場を迎え、ルーチンとしての試験・検査・監視業務と、研究者個人の意欲と資質に負うところが大きい調査・研究を、組織としてどう両立させていくかは、自治体の試験研究機関にとって、依然として大きな課題です。
抽象的な言い方ですが、精度管理に裏付けられた試験・検査・監視体制を維持しつつ、調査・研究については、地域の新しい課題を発見するだけでなくその解決策を提示していくことに、われわれ試験研究機関の存在意義があると考えます。
また、今後とも、食中毒・感染症・食品添加物・大気汚染・水質汚濁・化学物質などの諸課題について、専門的・客観的な立場から、科学的知見に立脚した情報を分かりやすく提供することの重要性は変わりません。
さらに、地方の衛生・環境研究所は人的・予算的な制約が厳しさを増すなかで、従来からの業務に加え、毒劇物・感染症・食中毒・飲料水・大気異常など健康危機管理の中核機関としての重い役割も期待されています。

こうした状況下では、技術者としてつらいことですが、現在の業務を再点検し、承継すべき技術とサンセットやむなしの技術の選別も必要となり、今後の新しい諸課題に対応する時間と労力を作り出していかねばなりません。
また、自分たちの業務内容や得られた成果は積極的に発信・アピールすることも重要であり、対外的発表も含めて、分かりやすさをキーワードに「仕事をかたちにしていく」必要があります。

当センターは、衛生と環境の両分野の技術者が同居していることを最大の利点として、技術的・科学的な立場から、全職員が力を合わせあらゆる課題に的確に対応していきたいと改めて決意しています。

平成１９年１０月

福井県衛生環境研究センター所長　坪内　彰